

AWFCJ まあじゅんのジャージー牧場 3か年改善計画書

	項目詳細	基準	現況	1年目	2年目	3年目	達成度
①飢えと渇きからの自由	粗飼料	安全に生産された必要十分な牧草	粗飼料を100%自給生産している(暖地型ローズグラス・放牧向きジャイアントスターグラス) 県の農業改良普及センターと土壌分析を行う	地元石垣島の稲作農家と契約して飼料用イネの栽培とその収穫方法を研究 WCS(ホールクロップサイレージ)をジャージー牛に供給	1年目と同じ取り組みを継続		
	配合飼料	安全に生産された国内産の穀物飼料	国の農研センター指導による飼料計算方法に基づき単味のエサを組み合わせオリジナルな自家配合飼料作りを確立している	借地を活用してデントコーンの栽培を試作 亜熱帯の気候条件を活用して二期作に挑戦 外国産の輸入飼料に頼らない経営方針を実践する	地元の米屋や豆腐店で生産された米ぬかやおからといったいわゆるエコ・フィードを常態的に取得できるように契約		
	放牧地と水	裏山の小川や地下水から流れくる潤沢な水源	現在小川の水は育成牛の放牧地のみ使用可能 他の牛舎には頭数規模に合った十分に広い水槽を数か所ずつ設置している	全ての放牧地において地下水を掘り当てる	1年目と同じ取り組みを継続		
②不快からの自由	子牛 (6か月齢まで)		子牛は1か月齢までは個室管理 その後は群管理 豊富な水資源で毎日子牛舎を洗浄消毒する 十分に広い子牛専用パドックがある	100%自給している粗飼料を活用して敷料を毎日交換 十分な厚さと十分な乾燥で快適さを確保する	病虫害としてのサシバエを完全駆除するため 牛舎周囲の灌木に向け定期的な薬剤散布を実施		
	育成牛 (6か月齢～20か月齢)		初産までに足腰を強くするため 急峻な山の斜面約2haに林間放牧している 削蹄の必要は全くなし	近年の集中豪雨のたびに表土が流れて露出する 岩石を定期的に除去 育成牛の足を守るため	1年目と同じ取り組みを継続		
	母牛		通年昼夜完全放牧を実施 亜熱帯地方なので暑熱と湿気の対策が重要 牛舎に大型換気扇と細霧ミストを設置している	1ヘクタール当たり6頭の放牧地を確保している 昨今の豪雨の影響でぬかるみとなって牧草が剥がれている個所が散見される	新たな牧草(ジャイアントスターグラス)の補植作業や 完熟堆肥の投入と 4年に1回草地更新の必要性あり		

	雄去勢牛		かつてはオスの子牛を濡れ子で販売していたが全く値が付かなくなってしまったグラスフェッドジャージー肉として販売することになる	育成牛専用として裏山の斜面を活用した林間放牧地を造ったがオスの去勢牛3歳齢までと共用する	一年目と同じ取り組みを継続		
③痛み、傷、病気からの自由	除角・去勢		メスは生後2週間以内に除角作業を実施 オスは6か月以内にバルザックによる去勢作業	後継牛としてメスの副乳頭を早期発見 獣医と相談の上除去手術を実施する	子牛の寄生虫対策としてコクシジウム症予防薬の投与時期を徹底周知		
	削蹄ほか		削蹄の必要なし (鼻環は装着しない)	生後6か月から育成舎へ移動 その際に首輪と名札を取り付ける	1年目と同じ取り組みを継続		
	分娩前後		難産の可能性を感じたらすぐさま分娩房へ連れてゆきかかりつけ獣医と出産補助の処置をする	濃厚飼料多給によるルーメンアシドーシスや第4胃変位 代謝障害の疾病牛がないか早期発見に努める	亜熱帯特有のオウシマダニの駆除対策として定期的なバイチコールの塗布を徹底周知		
	乾乳期		次回の出産に向けて十分な栄養を管理する	放牧地を細分化して効率よく牧草を食べさせる	近隣のサトウキビ畑との境界にある有刺鉄線を撤去し電気牧柵に変換		
④正常行動発想の自由	繁殖		牛舎の配置位置を考え海岸からの涼風を活用する 亜熱帯気候に沿った壁のない牛舎 柱と屋根は木製のトラス構造	健康状態の良好な母牛なら問題なく分娩後2か月以内の受胎(1年1産を達成できる)	搾乳牛の頭数に十分な広さのバドックを確保 遮光テントの設置 暗渠排水管を埋設し大雨でもぬかるまないようにする		
	分娩		悪天候時は分娩房へそれ以外は基本的に放牧地で自然分娩をさせている	放牧中の分娩には事故がある真夜中でも必ず1時間おきに観察する	一年目と同じ取り組みを継続		
	搾乳		毎朝全頭に対し平均5分間冷水によるブラッシングを実施	同左	一年目と同じ取り組みを継続		
	哺乳		繫留する場合十分なロープの長さを確保する	草食動物本来の能力を発揮させるため飼槽に刈りたての牧草を不断給与	一年目と同じ取り組みを継続		
⑤恐怖や悲しみからの自由							

その他	生糞尿の適切な処理		堆肥舎にて毎日タイヤシャボによる切り返し作業を行う 好気性発酵を施し栄養価の高い完熟堆肥を製造 牧草地とデントコーン畑に還元 化学肥料の使用を廃止	牛舎の畜産用浄化槽から排出される汚水のBOD (生物化学的酸素要求量)を計測する	一年目と同じ取り組みを継続 BOD濃度が高い場合 ブローを交換 生糞(固形分)が排水口に流れ込まないように蓋をする		
	オープンファーム		消費者の方々からの見学を自由に行っている	靴底用消毒槽の設置 家畜伝染病予防の周知	乳製品製造室の公開 (保存料など添加物不使用の証明)		